

ねこの みこ

猫養函信

第 4 4 号
平成 十 三 年
(2 0 0 1)
(7 月 1 5 日 発行)
(年 4 回 発 行)

弔 辞

東 明 雅

式田さん、あなたの七十六年の生涯は、あまりにも多彩であまりにも見事でした。博覧強記、しかも華麗な文才と軽妙自在な話術とは多くの読者・聴衆を魅了し、本を出版すれば忽ちベスト・セラーに、講演会の依頼は全国津々浦々から殺到しておりました。

特に平成四年の「死ぬまでになすべきこと」平成六年の「続・死ぬまでになすべきこと」は作者たる式田さんが、老いをいかに過ごし、死をいかに迎えようとするか、その理論と実践とを、やさしい軽い語り口で述べられたのでしたから、老いを迎え、また死の恐怖にさ

らされている大衆に取って、千天の慈雨のようないで迎入れられ、忽ち、ブームをんだのは当然でありましょう。そして、以後続々と出版された、老と死をどう迎えるかのシリーズも圧倒的な人気で迎えられました。考えてみれば、これらは二十余年の昔、老・病・死に苦しみ、悩む民衆の実態にふれ、その人々を救い、安心あんじんを与えるべく立ち上ったお釈迦様の菩薩行とその功德そのままだったではありませんか。

式田さんは、それらの著書・講演の中で繰り返し、人間は生きている間は、自分のことは自分でして、手も足も動かさず、人様に迷惑をかけず、ぼつくりのめつてあちらの岸に渡る大往生が理想であると、述べておられます。それ故、ひとり住みを気遣われるお子さんたちのお誘いごとをわけて、広い杉並のお宅に、ひとりで食事を作ってひとりで食べ、ひとりで本を読んだり執筆したり、時には多くの弟子を集めて連句などを楽しみ、寝ようが起きようが人に迷惑をかけず、本当に悠々と自由に快適に暮らしておられました。

連句は二十年前、新宿の朝日カルチャー・センターに入門されたのが始めでした。最初は深い考えではなく、老後の慰さみとされるつもりだったでしょうが、やがて、連句をやる、長生きする、頭が働かない、老いても友達が出来ると楽しいものであるという事に気がつかれ、盛んにお知合の方を連句に

引き入れられるようになりました。そして、そのうちに、私どもの連句会である猫養会の同人となり、やがて猫養同人会の理事となり、また、猫養会を代表して、連句協会の理事となり、平成三年には先輩二人とともに立机して、桃径庵和子宗匠と名乗られることになりました。

このように式田さんは連句の世界でも、すぐれた才能をあらわし、やがて猫養会副会長となり、A・C・C連句教室の講師とならると、月二回の教室は、その名講義に受講者が溢れ、引いては猫養会も会員が次々に増えるようになりました。また連句協会の常任理事になられると、猫養会と連句協会との関係も、従来よりはよほど円満にまた緊密になつて行きました。

これらはみな、あの誰とでもわけ隔てなく交際された人柄と、すばらしく回転の速い明晰な頭脳と同時に、一目でその人の本質を見抜かれる眼力の賜だったでしょうが、ともかく、私のみならず、猫養会員すべてが、これらのことをよるこび、感謝しているところでもあります。

ところで、これらの要職はみな激務で、式田さんの健康を次第に損ねて行つたのでした。数年前、手術をされた時以来、三八kgだった体重はそれ以上ふえず、近頃は一層痩せて、体力も落ち、立居も大儀そうにみうけましたが、大体、昨年は夏はことに暑く、冬はこと

に寒く、そのあたりから目に見えて弱って来られたのは事実でありまして、それが今年になつて、年頭は寒さがきびしかったものの、花が咲き、花が散り、五月ともなつたので、これからは次第に暖かになり、健康を取り戻されるのではないかと、ひそかに期待致しておつた次第でありました。

しかし、今年は協会のお仕事が多くなつた上、国民文化祭応募作品の審査やら、新庄連句全国大会の審査などが来ることになつており、精神的な重圧をおかけしたのではなかつたでしょうか。それでもこんなに突然になくなられるとは思つてもみませんでした。

本日は猫蓑会、また引いては僭越ながら連句会全体を代表して、二十一年間にわたつて連句の発展のため身心を尽して下さつたご恩に心からのお礼を申し上げるとともに、お身体の不調をこれほどと見抜くことが出来ず、あたらご急逝を止め得なかつた私の不明をお詫び申し上げるつもりでまかり出ました。
式田さん、何卒、私のこの声をお聞き届け下さつて、そのあと、安らかにおやすみください。

平成十三年五月二十日

猫蓑会会長

東 明雅

桃径庵追悼二十韻

咲きみちて南無くすれけり白牡丹	東 明雅
薄暑の道を遠ざかる蝶	坂本 孝子
出版記念多士済々の集ふらん	副島久美子
衣ずれかすか行きかはす友	中田あかり
島巡る觀光船を照らす月	内田 麻子
魚籠の秋鱒だれにあげよか	市野沢弘子
きみおもふとうかのきくをかたはらに	中川 哲
つめたき胸を抱きて暖む	上月 淳子
壺中物美祿醇醴玉箒	原田 千町
老酒の杯交はず敦煌	豊田 好敏
もののふの心で生きて優しくて	倉本 路子
冴える月浴び舞のひとさし	山崎 一恵
冬深し爪弾く糸のふと途切れ	佐古 英子
鎌倉の谷戸リスの太き尾	本田 弥生
ご免ご免怒つた顔も可愛いよ	篠原 達子
消えぬ残り香一条の夢	松原 弘子
センターのトスの見事に沸く拍手	橋野代々子
懐かし校舎ゆれるふらここ	田村 満子
花散りて水無き空に滯の見ゆ	松本 碧
俳諧の座春愁の刻	蒲原志げ子

平成十三年五月二十五日

起首

六月五日 満尾

一言を百遍

蒲原 志げ子

「困つた時は死んだふり」
これが十八番でしたよね。未だに騙されてい
る様な気がしてなりません。私が、
老いの春忘れましたと口拭いて
と句をつきましたら「死んだふりが一番よ」
だなんて：

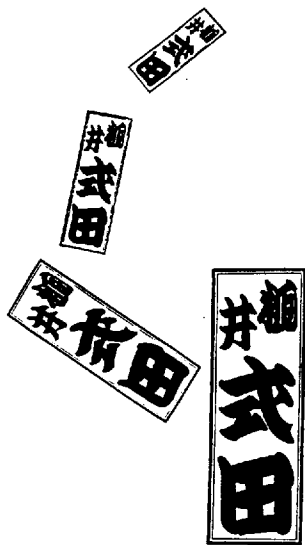
大正ロマンを身に付けられた、それこそ希
有なお方でした。「ごあます。」が瞬時に「コ
ンチクショウ」に変わる山の手と下町の粹。豊
富な話題にどれ程楽しませて頂いた事か、そ
の博識のカケラでも頂戴しておかなかつた怠
慢を悔やんでおります。

急いでは駄目。とご自分でもおっしゃりな
がら、この急ぎ様、でも、しっかりとご自分
の信念通りの終止符。冥界では先人達と閻魔
様をも交え楽しい連句の一座が開かれて居る
事でしょう。下手な娑婆の奴等の相手よりな
んぼか楽しいね。なんて高笑いが聞えて来そ
うです。

美味しいお酒はありますか。もう心配は無
いと思いますが、潮れない様にお気を付けく
ださい。そして極楽の道案内、連句同様、腕
を磨いておいてくださいませ。何をどう申し
上げて、やっぱり淋しい。この一言につき
ます。だから一言を百遍。

追悼吟

明易しあの世の連句いかならむ	伊藤敷彦	薔薇こぼれ微笑み空に返しけり	守男	鉄線花私の中の和子先生	洋子
卯の花やをみな聖と酌み足らず	福田真空	大輪の芍薬忽と散りにけり	路子	目をつむり筍飯に手を合す	鶴鳴
残されて万緑の橋永かりき	前田圭衛子	あやめより菖蒲の姿指図せる	弥生	今生の別れを告ぐる薄暑かな	蘭石
夏落葉姉ともたのむ友逝きぬ	麻子	戸を三日閉ざせしままに酒を煮る	寿子	あひよりてまたはなれゆく初蛩	常義
玉の緒やふつと発ちたる夏の蝶	孝子	桃径の庵淋しく猫の恋	武村利子	三社祭桃井式田の千社札	悟乃
ゆつくりと瞬き初むる星涼し	久美子	残さるる闇ひと叢の白薔薇	丁那	麦秋の金波を航きし棺かな	将義
羅の袖や浄土の風はらみ	あかり	たましひのいま翠陰に憩ふらむ	嫺	なすべきはなされ旅立つ青葉風	やすこ
和やかな笑顔は何処青時雨	弘子	酒少し蓮の台の心地よき	秀樹	大花火いのちどよもし逝き給ふ	さえ子
いさぎよく泰山木の散華かな	淳子	聖母月ひとりの母を召し給ふ	美恵	初袷背ぬきの粹を習ひとし	ゆみを
夢ならぬうつつませしや御来迎	千町	夏蝶や面影残す千社札	英子	一瀉千里翔けり給ふや朴の天	あや
才多き友を偲ぶや虹の空	一恵	普陀落へ漕ぎゆく袖の夕蛩	碧	青嵐や魔女の箒は月に消え	了齋
雷鳴は叱咤の声と賜はりぬ	梅田利子	初夏のよき風呂と酒佳き人に	豊美	やさしさを十二単に重ねけり	文伸
夏椿かぼそき肩を見失ふ	ふみ	逝くひとを三社祭の笛の音	紀子	いざさらば遊び尽して桃の径	義夫
頰け呉れし弁当に吹く若葉風	澄子	薫る風残して旅の便りかな	けんのすけ	ほととぎすあちらの岸も花に月	英二
端無くも風の攫ひし大揚羽	淑子	花に笑まふかんばせせず段葛	代々子	ほととぎす峠の雲に見え隠れ	玲
ただ待む微笑なりき朴散華	達子	青時雨いまも「めえめえしてますか」かりん	水壺		
瞑りませ極楽の席青葉風	志げ子	賞めたまひ論したまへる白团扇	暁巳		
打越の酒に涼しきほとけ哉	健悟	蒼穹の径咲き満たせ花ざくろ	昌子		
玉盞に天上の美酒朴の花	朱鷺子	さやうなら会釈して闇初蛩	一郎		
牡丹散るなすべきことをなし終へて	郁子	風薫る日に旅立ちぬ桃の径	志世子		
彼の世から啖呵聞く夜のかきつばた	美奈子	葬礼や五臓にしむる青嵐	くのあや		
		いつまでもうねりつつげし麦の秋	慎二		
		魂きはる命やひとり鉄線花			



また「おっかけ」してもいいですか

杉山 壽子

「桃井式田」の千社札

日下 悟乃

さやうなら和子先生

表秋の金波を航くわきし棺かな

将義

細身の紫煙ゆらす薫風

守男

太刀持の老若男女まじりゐて

秀樹

一人うたへばみな謡ひだす

英二

月を待つことも愉しき浜にをり

丁那

案山子にやつし笑まふカコちゃん

健悟

しゃつきりと着こなしてゐる秋袷

志世子

胃の腑にかろき一盞の酒

玲

手を打ちて地口軽口とび交はし

曉巳

倍ほどのびる窓際の猫

朱鷺子

真冬にも四宮による雀仲間

慎二

おけらになれば月さらに冴え

常義

外相の失言ルージユも濃くなりて

将義

パリの追伸おんな色々

守男

弁財天弥勒菩薩も夜叉もあり

秀樹

山間の湯にせずむ剣士よ

健悟

足袋にさへ香をたきこむ身だしなみ

英二

遠霞てふ銘のある茶器

丁那

ちる花に蝶ひるがえる夢心地

志世子

ほほえみだけが残る春宵

玲

平成十三年五月二十日 首尾

新中野「天祥」にて葬儀手伝い一同

「連句初めての方は?」「はい私です。」

「ようございませうか(ようござんすかと聞

こえた)では始めましょう。」といいながら、

和服の胸に両手を当てて、ぐつと襟元をおし

あげられた。その粋な身こなしに舞台の役者

を見ているような錯覚をおぼえました。

当時、二階堂氏と竹下氏が総理の椅子を争

っている最中で、

二階堂竹下ともに総理戦 壽子

と一直。これには目を見張りました。連句つ

て面白い。この一直で、先生に恋をしました。

今から十五年前の暮雨巷(加藤暁台居跡・東

海銀行頭取宅)での、和子先生との出会いで

す。この五年後、桃雅会が出来「あんたのめ

んどどう押し当てられたのよ!」「スミマセ

ン。オネガイシマス」「和子さんは猫養のナン

バーワンだから教えていただきなさい。」かく

して明雅先生ご推薦の和子先生から、身に余

るご指導を仰ぐ幸せ者となりました。利子様

と「おっかけ」といっては猫養例会後、先生、

哲様、好敏様とご一緒に喉をうるおしたこと

もたびたび。急に淋しさがつのります。ど

うしようもなく泣けてしまいます。先生!そ

ちらはいいところですか。また「おっかけ」

してもいいですか。

式田先生と初めてお会いしたのは、平成六

年十一月。知人が「深谷で式田先生が講演な

さるので、帰り道に立寄って貰おうと思っ

ている。」とのことで、物見高い私は部屋の隅で

見学させてもらうことにしたのだった。

式田先生は「発句は軽いのが良いのよ。」と

おっしゃって、小短冊を差し出された。

葱提げて隣町より来たりけり 和子

見学のつもりで控えていた私に「あなたも

句をだしなさい。」と声をかけて下さった。ど

んな句を出したかは覚えていない。たしか、

幼い子が、戸を開けようとして指を挟んでし

まった、というような意味の事を出したので

はなかったか。先生は「表にはちよつとねえ」

とおっしゃたが、連句が何で表が何であるか

も知らなかった私には、難しい問題だった。

それでも、近所の鮎屋で呑みながら、あれこ

れ連句のことを、教えていただき、「昔丈翁俳

諧聞書」と、名刺代りの「桃井式田」と書か

れた千社札を頂戴した。

千社札は、古くなると、紙の部分が溶け、

墨だけが、くつきり残るのだという。いつの

日か、私が頂いたと同じ千社札が、どっかの

神社や仏閣などで目にするところがあるかもし

れない。そんな時までに、少しマシな句が詠

めるようになっていなければならないのだが。

表市や墨の抜け来る千社札 悟乃

日中国際連句の幕開け

成蹊大学教授 近藤 蕉肝

五月三・四日に北京大学で開かれた、第一回北京大学詩歌比較研究国際大会において、日本と中国の長い歴史において初めて、日本人と中国人が同座して日本語と中国語で連句を巻くことが実現した。これにより和漢や漢和の伝統を越えて、日中国際連句の歴史が始まった。ここに簡単に報告します。

大会一日目は五座に分かれて一巻ずつ巻き、二日目は全員が一堂に会して一巻が巻かれた。これと大会以前に非公式に巻いたのを合わせると、今回の訪中で巻かれた日中連句は七巻になる。いずれもまだ校中中であるが、出席者全員が満足する結果が得られたものと信じます。

作品七巻の概要は、二十韻が三巻、半歌仙が二巻、獅子の子(十四句)と二十句各一巻、合計百三十句です。この内、中国語の句数が五十九、日本語の句数が七十一。中国人の句数が七十一、日本人の句数が五十九。参加人数は、中国人が延べ四十七名、日本人が延べ三十七名であった。日本語の句数が日本人の句数に反比例して多いのは、中国人が日本語で句を出したり、作品が日本語訳のみで出されたためです。また、日本人参加者の延べ人

数が多いのは、大会前に非公式に巻いた半歌仙に中国人が四名しかいなかったことと、北京大学の日本人留学生や日本語教師が参加したためです。

今回の日中連句の試みは、中国語の形式の模索に向けての実験的意味がありました。多種多様な形式がでてきましたが、その中には将来の主流を予想させるものもありました。伝統的な和漢・漢和のほとんどが、長句も短句も五―五語、つまり五言絶句の形式で書かれています。今大会ではその形式はありませんでした。代りに、古典詩人をもつて任じる中国人によって七・七―七・七語、つまり七言絶句の形式が使われました。その他、既に二十年ほど中国で行われている漢俳(俳句形式漢詩)と漢歌(短歌形式漢詩)の形式、つまり五・七・五―七・七語をそのまま転用したものもありました。漢俳と漢歌の中国における流行を見れば、当然の現象と言えます。更に、三・四・三―四・三(または三・四)語という形式が、大会に参加された中尾青宵氏によって日本語の韻律論の立場から提案されましたが、これに同意する中国人も少なくなかったようです。林岫(リン・シュウ)教授は、この形式に同意しつつも、詞の理論の立場から、三・四・三―七語の形式を主張されました。また、鄭民欽(テイ・ミンキン)教授は、古典的表現にも現代的表現にも対応できる幅広い可能性を持つものとして、五・

五―七の形式を提案されました。総括すると、十一七語の枠の中で多様なリズムを追求するという新しい形式が見えて来ました。

私は我楽多こと劉徳有(リュウ・トクユウ)先生と組んで、二つの座で捌を勤めました。その発句を紹介して作品紹介に代えさせていただきます。五月三日、北京大学のキャンパスにある未名湖(ミメイコ)という湖の辺で開かれるはずだった連句会が、雨のため近くの東方文学研究中心に場を移して行われました。小雨の中、林を抜けたところに赤壁の古い様式の門がありました。門には藤が絡み馥郁たる芳香を放ち、折からの雨に打たれてはらはらと散っていました。はからずもそこが会場だと言われて、案内されるままに私達は、そのゆかしい門をくぐりました。

藤門の香りも高し雨宿り

蕉肝

翌日、我楽多氏は私の求めに応じて、発句を日本語でさらさらと書いて私に見せました。

未名湖の若葉もまぶし雨上がり 我楽多

前日の連句会で歴史の幕を開いたばかりの日中連句の前途を、共に祝福する気持ちで込められていると思えました。おみごと。よく見ると、私の発句と対句的になっていて、中国人の対句好みに茶目つきさえ感じました。

第十五回 藤祭奉納正式俳諧

次第	役割
一 席改め	宗匠 上月 淳子
二 席入り	脇宗匠 原田 千町
三 配硯	副宗匠 梅田 利子
四 献花	執筆 青木 秀樹
五 執筆呼出し	知司 島村 暁巳
六 文台捌き	副知司 近藤 守男
七 俳諧興行	同 山口 美恵
八 花前	座配 椿 紀子
九 玉串奉奠	座見 秋山志世子
十 花の句披露	花司 田村 満子
十一 端作り	配硯 橋野代々子
十二 吟声	同 中野 昌子
十三 文台返し	同 日高 玲
十四 作品奉納	
十五 納硯	
十六 挨拶	
十七 退席	

平成十三年四月二十五日

於亀戸天神社興行

奉納正式俳諧

二十韻

風狂の身を祓はれて藤祭	明雅
神酒うららけく染むる土器	千町
春暮るる巨船次々棧橋に	暁巳
振り返りつつ坂を往く人	満子
かまくらの童に月も客となり	利子
呼んであるのはたご蛙らし	美恵
指切りのこと思ひ出す厨裏	紀子
ぷりんぷりとジーンズの腰	昌子
遠くよりトランペットの響き来る	郁子
銀行預金溜まる楽しみ	好敏
錫の鉢世界の珍味盛り合はせ	千恵子
唇触れて起こす吊床	英子
をしみなく愛は奪ひて奪はれて	かりん
ヨーガのポーズ決めて虫の音	啓子
月蝕に妖精踊る黒い森	守男
ずっしり重い初獵の銃	代々子
過ぎてきしあれやこれやをたぐり寄せ	玲
憶良の歌を口ずさむ母	志世子
花匂ふ遠の朝廷の石畳	淳子
猫の子抱いてのぞくコンビニ	執筆

執筆を終えて

青木 秀樹

私の連句事始は、明雅先生に初めてお目にかかった昭和五十九年八月二十三日。正式俳諧との出会いも、猫養会の第一回亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行を見学した時だから、相当に古い。宗匠は明雅先生、執筆は中川哲先生。つぎは本邦初の女執筆だという明雅先生の前宣伝にのり、正江先生の執筆姿を拝見した深川芭蕉記念館での興行だった。自分には無縁のものと思ひ、真剣に取組む先生方のお姿を印象に留めるだけであった。

明雅先生から執筆をとのご沙汰をいただき、えらいことになったと言うのが正直な感想。最大の重圧は、この一年間ケガや病気で穴をあけてはいけないということ、つぎに正座に耐えられるように体重を減らすことであった。

執筆のお役は、立ち居振舞い、お辞儀、文台捌のお作法、懐紙への書き取り、吟声の五種競技のようなものであった。普段の自分の生活からほど遠いことをする緊張感があったが、すべて合理的な仕組みになっていることが、明雅先生ご夫妻はじめ、経験者の先輩方のご指導でよく理解できた。本番は自分でも意外であったが、かなりリラックスしてできたと思う。いまは、芦丈門の正式俳諧伝承に一役務められたことに満足している。

「襖の雨」 東 明雅 捌

きらきらと襖ぎの雨や藤祭 明雅
朱塗の橋に群るる仔雀 芙紗
臍蜜柑香氣まるごと掌に受けて 朱鷺子
操り人形首をめぐらす 未悠
物陰に何やらひそむ夏の月 英二
銅鑼鳴るたびに繰り返すキス 順子
アフロディテ海の泡より生れでて 雅
闘士は眠る丘の奥津城 朱
二代目はただ政治屋になりはてぬ 二
すつぽん鍋にはずむ商談 悠
争奪の修羅場をくぐる冬の蠅 ナオ 芙
大僧正は微動だにせず 朱
佳き酒は即ち水と井に 順
寄つておいでよビーフ焼くから 芙
月の道手をつないでと中年増 雅
信濃のあはれ伝ふ秋風 順
猪もたまに訪ふ侘住居 ナウ 芙
北斎紛ひ残す旅絵師 朱
散る花を股よりのぞく酔狂さ 二
フレンチホルン音ものどらか 悠

連衆 根津美紗 橋朱鷺子 棚町未悠
日高英二 竹内順子

「壽」^{いもちなが} 倉本路子 捌

朱の橋に見下ろす藤や壽 路子
叶ふことなら鳴けよ照鷺 あや
清明の背広姿の軽やかに 利子
書類抱へて大股で行く 有子
蚊遣火のまつすぐ昇る軒の月 弘子
プールを冷やし美女をはべらす 秀樹
口説き上手口説かれじょうず嘘上手 弘
総裁選は一回でけり 利
待ちかねし^{いもちなが}にへそくりつき込んで 有
足をとられる駅の階段 や
ぼる市の動かぬ時計鉄兜 ナオ 樹
銀貨がひとつひそむ鬮汁 利
山出しのままが可愛い小悪魔 や
二科展の裸婦妻におさまり 樹
まんまるな月あはあはと震災忌 利
しばし屋台の濁り酒酌む や
半生の区切りのためのひとり旅 弘
牧歌集表紙色褪せ 有
暮れ六つの鐘も間近き花篝 樹
バックにしまふ春の手袋 弘

連衆 中林あや 梅田利子 佐々木有子
市野沢弘子 青木秀樹

「藤房の滴」 小池啓子 捌

藤房の滴や雨の藤まつり 啓子
新作の碗炉塞ぎの興 志げ子
さへづりの主のあてっこきりもなし 健悟
電信柱消えてゆく街 時子
開拓の鋏も千把も月の客 玲
定刻に来る無心うそ寒 健
君の掌の上で数へる柁の実 時
ダンス・バトルで競ふ得点 啓
閣僚に入れてくれとは言ひだせず 玲
冬菜を洗ふふるさとの母 時
お地蔵の運はるる日の雪螢 ナオ 健
をとこの匂ひ犬に嗅がれて 啓
ヒトラーの愛人として生きたるが 健
分析できぬ三つ児の魂 玲
月涼しせせらぎ渉る車椅子 時
アルバイト料貰ふコンビニ 玲
押忍といふ挨拶やめた柔道部 健
手酌の盃を重ねては酔ひ 健
この花は時空を超えて開く花 時
ラピュタの城に帰るてふてふ 玲

連衆 蒲原志げ子 佛淵健悟
梶井時子 日高玲

「ルノワール掛けば」 鈴木慎二 捌

ルノワール掛けば藤棚いかばかり 慎二
 声たのしげなあれは驚姫 孝子
 海峡をまんたら蝶の渡るらん 和弥
 復刻本の企画つぎつぎ 順子
 紅き月流しそうめんすすりけり 央子
 一輪車の子梧桐の道 昌子
 借りて着る上衣に彼の香の籠り 順
 思いのたけをインターネットで 央
 尖塔の最も近き神の国 順
 宰相の椅子やはりうれしき 孝
 きはどくて忘れられない河豚の毒 弥
 猟銃好きな村の校長 弥
 病身の妻の愁ひの日記帳 孝
 鏡に写る月のジェラシー 弥
 後朝の野菊よ僕は宇宙人 昌
 栗茸坊主洞に棲みつき 弥
 コクテール七彩色につき重ね 順
 カルメンになりパソ・ドブレ舞ふ 央
 優勝の花に打ち振る騎手の帽 二
 陳列店に並ぶ草餅 昌

連衆 坂本孝子 権頭和弥 和田順子
 遠藤央子 中野昌子

「藤浄土」 長崎和代 捌

反り橋を二つ渡るや藤浄土 和代
 春の祭の準備万端 淑子
 孕鹿瞳やさしく集ひゐて 淳子
 レンズを磨き決めるポジション 庸子
 振り仰ぐロンドン塔の月涼し 芳子
 伯爵夫人と波乗りの栄 曉巳
 天蓋の寝台に侏儒を忍ばせる 淳
 アロエ一鉢いつも健康 淑
 亡命者雀と会話交はしつつ 庸
 消して消されて駅の黒板 巳
 豊替おらが宰相迎へ入れ 淳
 木綿に限る湯豆腐が好き 庸
 ろくろ首おでこで暖簾かきわけて 芳
 髪振り乱し野分だつ中 芳
 逢引は葡萄酒醸す月の蔵 淑
 秋の扇の要ゆるびぬ 庸
 古寺の垣根をこわしパーキング 巳
 地場産業をホームページに 淑
 花筏たはむる如く鯉泳ぎ 淳
 園児の列は囀の中 巳

連衆 金久保淑子 上月淳子
 久保田庸子 松島芳子 島村曉巳

「紫の房」 生田目常義 捌

紫の房滴るや春の池 常義
 雀の子鳴く大屋根の中 一恵
 漬け込みしみがき鯿に味しみて 好敏
 磁石で止める覚え書きメモ 千恵子
 狩人の弓張を背に帰り来る 丁那
 赤古里の裾にぬくき温突 好
 声ひそめ甘くささやきすりよらん 一
 補習授業が恋の馴れ初め 千
 割り切れぬ円周率の割り切れる 丁
 執行猶予終へてはればれ 好
 ほろ酔ひて仰ぎてゐたる雪解富士 丁
 業平忌にはホスト遊びを 千
 eメール四十路の恋の煽らるる 丁
 張り込み刑事の頸にうそ寒 千
 島の月豚も小犬も道に寝て 一
 下り鮎とる湖に住むわれ 好
 向う脛さずあとの数勲章に 常
 すぐに舞台を踏ます吉本 好
 花のもと明日があると合唱し 千
 喜望峰へと清明のころ 丁

連衆 山崎一恵 豊田好敏
 鈴木千恵子 浅賀丁那

「藤房の」 登坂かりん 捌

「神酒すこし」 八代 嬬 捌

「藤の宮」 東 郁子 捌

藤房の長さ比べや太鼓橋 かりん

穀雨に濡れて光る爪草 了齋

一の膳二の膳の春祝ふらん 紀子

新人賞がベストセラーに 英子

蚊喰鳥とび交ふ湾に月昇る 麻子

汗ばむ肌を髭がざらりと 齋

身ごもりのこれほど重き雅子様 麻

畏みて言ふDNAやら 英

粘菌の限りなき数森の中 紀

鉈を銜へる口に鉄の香 齋

サッカーは幼稚園から仕込まれて 麻

電球に寄る寒の雛たち 齋

買はれ来て異国の街に立ちつくし 紀

言葉いらぬ宵闇の闇 麻

着メロが鳴らぬケータイ冷やつこく 英

秋の出水に牛も逸散 紀

複製の巧みをこらす武家屋敷 ん

祖母の形見の打掛けの紅 麻

満開の花に淡雪降りかかり 齋

朝寝の夢はゆらりゆらゆら 紀

連衆 鈴木了齋 椿紀子 佐古英子
内田麻子

神酒すこし亀にもささげ藤祭 嬬

ゆるりと歩む類に柔東風 千町

春惜しみ異国の人と語らひて K

情報ルーム託児所もある 壽子

自転車のパンク修理を汗の月 守男

甚平の裾ちよつと長過ぎ 志世子

恋女房伽にあがると聞かされし 町

結婚指輪鏡台の上 男

下取りの電化製品有料に 同

豚骨ラーメン汁も残さず 町

着膨れてチェロの練習励みをり 壽

六甲風つこのころ 世

球場に轟く逆転本塁打 男

トレーラーハウス注目の中 壽

月影にもつるる二人聖魔墟 K

金の林檎をくれる少年 町

職退きてひねもすのたり冬隣り K

何も言はない何も聞かない 町

天へ散る花追ひかける鳥のゐて 壽

歌ひつつ行く初虹の下 世

連衆 原田千町 加藤K 杉山壽子
近藤守男 秋山志世子

朱の橋や雨の淨むる藤の宮 郁子

鳩鳴く声も春闌くる頃 清子

ボンゴレに浅蜷たつぷり使ひめて 久美子

テレビゲームの子等の賑やか 泉子

月涼し外湯巡りの下駄の音 利子

団扇にかくす胸の高まり 有史

煩惱は二股の恋選びかね 久

棚に並んだ縄文の壺 泉

ペルシャ猫金目銀の目はべらせて 清

初氷踏むパリの石段 泉

絨緞に千夜一夜の夢重ね 史

遠く遙かに絶島の嶺 清

凜とした海の漢に惹かれゆき 利

新酒含みて迫る心中 史

魔女がとぶクロワッサンのやうな月 清

色なき風がさやさと鳴り 久

一病をいたはりはやも傘壽過ぐ 郁

軟式テニス励む若者 利

旅人をすつぽり包む花吹雪 久

心ゆくまで蝶とたはむる 史

連衆 下鉢清子 副島久美子
青木泉子 武村利子 荒川有史

「江戸っ子三代」 山口美恵 捌

三代の江戸っ子らしや藤祭 美恵
 まつづく行けば亀の鳴く池 ゆみを
 春興のケイタイメールきりもなし 和子
 チカチカ光り読めぬカタカナ 芳子
 寒稽古下弦の月へ矢を放つ 代々子
 かじけ猫あるしやれた揺り籠 佐紀子
 網タイツデイトリツヒがはいたつけ 和
 ラップに乗ってチョー魅力的 代
 巷にはものけなぞものさばって を
 会長候補自薦ばかり 佐
 蠅を逐ふついでに十字切るシスター 恵
 苺ゼリーの固まりし頃 代
 煽られてその気ないのに彼の胸 を
 いやだいやだはいいとうそ寒 和
 月影に東塔くるく立ちぬたり を
 新酒に酔ひて自転車を押す 芳
 不戦勝しろまる続きまだ運が 代
 はらからの夢包む山脈 を
 御園生におめでた便り花爛漫 和
 連理の枝に休む蝶々 佐

連衆 青島ゆみを 式田和子 藤井芳子
 橋野代々子 間佐紀子

「碧落の池」 山本要子 捌

碧落の池にうつりて藤祭 要子
 おたまじゃくしを覗く欄干 澄子
 小短冊春の炬燵に作るらん 達子
 宅配便のベル不意に鳴る あかり
 縞蜥蜴背を光らせ昼の月 碧
 白絣着て空家探検 珠枝
 ヨウちゃんと呼んでくれたのあの美形 り
 ご飯つくるのいやよ生涯 碧
 峠越えて移動劇団賑やかに 達
 もののはずみに唄ふ法華経 澄
 新宰相狐狸を追ひ出して 碧
 蒟蒻並べ寒の水撒く 澄
 野つ原で打ってしまったホームラン 澄
 晩婚成就押しの一手で 達
 月影に肩を滑りぬ秋裕 り
 朽木に群るる箒茸の香 り
 連絡船デツキでヌーボーくみ交す 枝
 トロイメライの曲に聴きほれ 要
 大玻璃戸壁面の如く花篝 達
 野点の席に蝶の連れ舞ふ 枝

連衆 八角澄子 篠原達子
 中田あかり 松本碧 花巻珠枝

忘れられない付合 ①

俳諧の連歌 倉本路子

連句って何だろう？軽い気持ちで朝日カル
 チャーセンター連句入門を覗いた。連句と言う
 からは、五七五の句がずっと続くのだろうと
 いう程の知識しかなかった私…
 「先生、これは連歌ではないのですか」
 「そうです。俳諧の連歌です。」
 「……」
 でも、こんなものが面白いかしらと呟い
 たら隣にいらした徒司様が
 「三年我慢したら面白くなるヨ」と、おっし
 やた。ともあれ月謝は前払いだしと通っている内
 に、のめり込むのに半年とはかからなかった。
 以来面白くて、楽しくて、有難がつて勉強させ
 て貰っているが、うまい付句ナンテなかなか出る
 ものじゃない。入門以来数年は鳴かず飛ばず、
 二十韻「行く春や」の巻の時、珍しく秋元先生
 がウラの折端を付けられた。
 赤子に乳を含ませる母 正江
 家業継ぐ心決まりてUターン シズ
 凍裂の音響く裏山 路子
 「これはいい句です。どんな気持ちでつけら
 れましたか。」と、明雅先生。
 私には忘れられない付句の一つになった。
 年は取っても褒められると嬉しい。今思えば、
 それから連句の付味というものに片目が明い
 た様な気がする。

連句の日々に感謝

花巻 珠枝

「猫養通信」へ一文をといたお話し、本当にびっくりと困惑でございました。なんとか辞退したい旨申し上げましたが、再度のお勧めもあり、思い切つて、皆様へのお礼かたがた、私と連句との短いながら、気分だけは満ち足りておりました蜜月?の時に書いて書かせていただくことに致しました。

東京へ参りましたもとは、主人の仕事の為ではございましたが、思いがけなく楽しい連句の日々が待っております。

友人に誘われ、恐る恐る伺いました「南柏の会」での、明雅先生とご一緒できましたあの日の連句の一座が、私を真っ直ぐに連句の世界へと導くそも馴初めだったのでございましょう。そして三年後にはまた関西へ戻らねばならぬという、焦りのような、悲しみのような思いをいだきつつ、夢中で連句の日々を送つて参りました。まだなにも分かつていないのに、遂に帰る日となりました。先生方に猫養会の皆様にいっぱいの感謝を込めて今、この文を書いております。でもまだ私と連句との関わりを終わりにするつもりなど決してありません。今後ともお会いする度にまた素晴らしい座の隅っこに置いて頂けます様に。

新緑やあの町も好きこの町も

珠枝

薄暑の風に吹かれ幸せ

全

歳時記は豊かな言葉あふれるて

全

A C C に学んで

棚町 未悠

鬼たちの秋だれがみつけた
あそこだと枯葉の音が教へてる
声をなくした冬のこぼろぎ
美穂
美紀
瑞恵

二年程前、大学の授業で巻かれたこんな歌仙集「七隈十歌仙」に出会って、心惹かれたのが連句との初めての出会いだった。福岡の七隈(ななくま)にある大学で近世文学を教えておられた、白石悌三先生からいただいたもの。今ならば、付けと転じの面白さにと言葉になるが、その時は今風な言葉の流れに感心し、平安朝の連歌のような連句が、現代でも行われているのを初めて知った。連句熟練者から見ればいかにも学生の習作かもしれないが、私には心地よい衝撃だった。

そしてその秋からA C Cの連句入門教室に行くようになった。ここで基礎から連句を学ぶことができ、土良の会の実作と合わせて、少しづつではあるが勉強中だ。森羅万象あらゆるものごとを表現する、といわれるように、服役者も出るし、恋の様々な姿もあり、まだまだ慣れないで一回毎に冷汗を繰り返している。でも現代には幻でしかない遊郭やその周りのことばが懐かしげに出てくるなど、過去の時代の何時にでも、あるいは未来にでも、時空を超えてふつと降り立った句を詠める、そんな魔力に取憑かれようとしている。

また一年程前からインターネットにある矢崎藍さんの「連句わーるど」で、鎖連句に付け句をして、遊んでいる。一万句以上も延々と続いている座だ。ここではまた明雅先生・藍さん・片山多迦夫さんの三吟がライブで実況されたり、そしてどの句が治定されるのかクイズが時々ある。藍さんの五句から

海の底ひに戦鬪機朽ち
を選び、次に明雅先生の五句の中から
慟哭の摩夫仁の丘をひとめぐり
を当てて、賞品のししやもが本等に送られてきたのには驚いたり嬉しかったり：参加者はワイワイと盛り上がっている。

eメールを使つての文音も、先輩の方々にお願いして実践中、とても勉強になる。「連句わーるど」で出会った三重県とアメリカに住む友と三人で一卷を巻いたりもしている。

白石先生とは三十年のお付き合いがあり、子供達が小さい時よく遊んで下さったり、次男の名付け親だったり：でも連句を一緒にすることはなく、鬼籍に入られ、この夏もう三周忌が来る。私が明雅先生のもとで連句を勉強しているとわかったら、裾野がこんな所まで広がったかと驚かれるだろうか。

行き行きてまた行き行きて萩の原

悌三

遊女と寝たり月の一つ家

全

猫養会案内

○猫養会時雨忌

日時 十月十七日(水) 十二時〜

場所 芭蕉記念館

住所 江東区常盤一・六・三

電話 03-3631-1448

正式俳諧の後二十韻興行

○猫養会新会員紹介

小池啓子 山田喜美枝 久保光代 梅田實
須賀敬子 中林あや 鈴木了斎 棚町未悠
若林文伸 竹内順子 吉行和彦 松島芳子
荒川有史 林鐵男 藤井芳子 富田涼耳

新刊紹介

小説「つらつら椿」 別所真紀子 著

人物往来社 千九百円

文化文政期に活躍し成美や一茶とも親交のあつた女流俳諧師五十嵐浜藻について、著者はこれまでに研究論文のほかに「浜藻春風」、「浜藻歌仙留書」という愛すべき二編の短編小説を発表されているが、この度の「つらつら椿」は、それらの上にさらに大輪のロマネスクの花を咲かせた長編小説である。浜藻宗匠を取巻く連衆の生き様を描く中に当時の市井の人間模様が彷彿とするように構成されており、さらには恋やお家騒動や人攫いや島流しのエピソードも絡んでさながら秀逸な連句の一卷を読むような面白さである。(英二)

第一回「源心」コンクール募集要項

この度「源心」のコンクールを企画いたしました。どしどしご応募ください。

形式

「源心」独吟不可。
過去の作品でも可。ただし、選者の添削をうけたものを除く。

扱は猫養会以外でも可。
所定の用紙を使用。コピー可。
(用紙は例会等で配ります。
地方には送付します。)

応募用紙

所定の用紙を使用。コピー可。
(用紙は例会等で配ります。
地方には送付します。)

応募料

送り先

横濱市港北区
太尾町一四〇五―一〇九

松本 碧宛

受付期間

平成十三年九月一日〜十月末日

選者

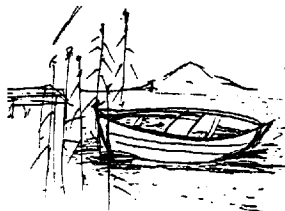
東 明雅先生
平成十四年一月十六日

賞

問い合わせ

梅田 利子迄

猫養会初懐紙
天・地・人
電話FAX 0471728119



○猫養発展基金にご協力有難うございます。

四千元 匿名

一万円 青木秀樹 浅野黍穂 吉村忍みこ

亀戸天神社

一万四千九百二十円 生田日常義「新時代

テレビビジネス」出版記念会

(敬称略)

後記

佛沢健悟さん長い間「ねこみの通信」編集の労をありがとうございました。今号から私もバトンタッチいたしました。宜しくお願ひいたします。

その最初の号が、式田和子先生の追悼号になるとは、思いもかけないことでした。先生の生々としたすばしっこい脳細胞から教えて頂くことがまだまだありましたのに。寂しくも残念なことです。

季刊 「ねこみの通信」
発行者 猫養会連句会
編集人 日高英二・玲
世田谷区代田三十九・八
〒155-0033
印刷所 アート工業株式会社